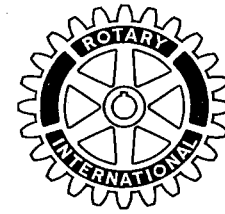


# ロータリー礼賛



R I 第2720地区  
別府中央ロータリー・クラブ

鳴海淳郎



はじめに

|                        |    |
|------------------------|----|
| 1. ロータリーは心の友をつくる ..... | 2  |
| 2. ロータリーは人をつくる .....   | 3  |
| 3. ロータリーは信用をつくる .....  | 4  |
| 4. ロータリーは感動をつくる .....  | 7  |
| 5. ロータリーは夢をつくる .....   | 11 |
| 6. ロータリーは青春をつくる .....  | 12 |
| 7. ロータリーは平和をつくる .....  | 13 |

おわりに

## はじめに

これは30年にわたる私のロータリー・ライフの中で、とくに先輩ロータリアンやロータリー雑誌より得られた感動や知識を体験に基づいてまとめたもので、将来への希望や願いも込められています。

ロータリアン必携（1987年改訂版、第1巻）に“奉仕に投資するロータリアンは、自らの生活をも豊かにする”とありますが、この言葉より次に述べる色々なことが連想されます。

ご参考いただければ幸いです。

2001年1月1日

75歳の誕生日を迎えて

著者

## ロータリーは心の友をつくる

人と人を結ぶ思いやり、これが誠の親睦です。ロータリーの発祥を尋ねると、その基本概念は Friendship にあり、心の友をつくることにありました。

1896年2月27日、ポール・ハリスがいよいよシカゴにやって来て、法律事務所を開きましたが、当時のシカゴは世紀の変わり目で、産業の発達は著しく、人口は爆発的に増えましたが、一方において労働争議が絶えず、まさに沸き返る状態を呈していました。このような不安定な社会的、金融的情勢は、弁護士にとっては最高の働き場所を提供してはいたものの、乱雑に拡張した大都会の生活はテンポが速く、追いつくのが大変で、ポールはある意味で孤独でした。多くの知り合いがいるとは言え、本当に親しい友人はいなかったのです。

彼の求めていたものは、自分が育ったニューイングランドの小さな町で感じた隣人愛と家族のような親しみやすさ、つまり「友愛の心」でした。

これがロータリーの発祥につながるわけですが、ロータリーでは、例会出席によって会員相互間の知己 (acquaintance) が得られ、例会を重ねるにつれて相互理解が深められ、親密の度が深まらなければなりません。

この場合、ポール・ハリスが言っているように、ロータリーではあ

るがままの自分をさらけ出すことです。そうすると心のパイプのつながった友情 (friendship) が得られることになりますが、ロータリーにあっては、単なる社交上の親睦に終わることなく、心のふれ合いによってお互いが啓発される奉仕の芽生えがなくてはなりません。

このような意味で、「心の友」が一人でも多く得られるのがロータリーの楽しみの一つです。

## ロータリーは人をつくる

佐藤千寿パスト・ガバナーの著書に『ロータリーは人を作る』というのがありますが、ハーバート・テラーは“Rotary is a maker of friendships and a builder of men”と言っています。

つまり、彼はこの言葉を含めてロータリーを次のように定義しています。すなわち、『ロータリーとは、友情を育み、人と社会を作り、世界各国の人々の間に善意と友情を芽ばえさせる団体である』と言っています。

そしてまた、『ロータリーのしなければならない大きな仕事に人格者を育てること、つまり人作りがあるのではないか。また、そのことに関してロータリーには大変な責任があるのではないかと、私は思っ

ております。政界や実業界において、また地域社会や家庭において — つまり、生活の様々な領域において有能な役に立つ人物を育成すること — そのことこそロータリークラブのなすべき仕事ではありませんまいか。よい市民、よい指導者を育て上げることは是非必要なことであります。』とっております。(ハーバート・テラー、菅野多利雄訳：「我が自叙伝」より)

ロータリアン誌1973年10月号(ロータリーの友1973年11月号)に『ロータリーは人間を変えるか』というシンポジウムの要約が載っていますが、結論として、ロータリーは多くの点で人を変える、全部よいほうに変えるのであるとしています。

向笠広次元R I会長は、『ロータリーの効果は精神的汚染の治療に止まらず、個々のロータリアンの性格をも変えるという積極的な効果をもたらす。つまり、真に熱心なロータリアンに対する報いは、より親切な心とより優れた性格が与えられることである』と述べています。

(1975年R I発行・ロータリーの世界より)

## ロータリーは信用をつくる

カルロ・ラビッツァR I前会長は「ロータリー2000：活動は — 堅実、信望、持続」というテーマを掲げられ、行動することを奨められ

ました。

そして、『信望とは、私たちが家族に、事業に、職務に、また自分のクラブ、地域社会に対し、いずれの場合も常に良心的な行動をすることを意味しますが、ロータリアンが誠実であることを実証し、高度な道徳的水準の模範生であれば、人々は皆ロータリーのしていることに信頼を寄せます。今日、国際ロータリーが最高レベルの信望をかちとったのは、ロータリアンが、ポリオ・プラスを通じて人道的奉仕への献身を実証したからです。同じように、全会員が皆、ロータリーの掲げる理想を日常生活において実証すれば、どのクラブも地域社会の信望をかちとり、また、持ち続けることができるでしょう。』と述べています。

つまり、真のロータリアンとしての日頃の言動や実績によって信望、即ち信用が得られ、仕事もうまく行くものと信じます。

足立政男名誉教授(立命館大学、経済学博士)は、その編著『シニセの経営』において、めまぐるしい変転推移の中で幾百年も永続し繁栄している数多くの老舗の実態を探り、その家訓や経営哲学、経営手法をわかりやすく解説していますが、この中で、企業の永続と繁栄の秘訣は正々堂々の『正直正路』(しょうじきしょうろ)の経営哲学にあるとし、道徳と経済は一体であると言う『道経一体』の視野に立ち、顧客の信用と信頼を回復するよう努めることが喫緊の要務であると言っています。そして、企業経営者はその企業を永続し繁栄させるため

には『最もよく人を幸福にする人が最もよく幸福となる』との哲学をもって事業経営に徹することであると述べています。

わたしは、これを読んで、これこそロータリーで言う職業奉仕の真髄に触れたものと非常に深い感銘を受けた次第です。

“Nothing but the best” (これ以上良いものはない)

by John Heilig

これは20世紀の暮れから21世紀の正月にかけて読んだ「Mercedesメルセデス・ベンツ 栄光の歴史」のタイトルからとったもので、車に関する著述で有名なジョン・ハイリッグは、メルセデスについて次のように言っています。「100年という時代の中で変化しながら、しかも、どの時代にも常に最高の水準を守り続けてきた。これは自動車業界では他に類を見ない。それが、メルセデスを“この比類にき存在”と呼ぶ理由である」としております。

わたしはこれを読んで、製造業の場合には「これ以上良いものはない」という気持ちで、サービス業の場合は「これ以上のサービスは出来ない」という気持ちで努力すること、医師の場合は「患者さんのために最善の医療を施す」よう努力することであると考えました。そして、「こうすることがその人の信用につながるのだ」ということをあらためて痛感した次第です。

## ロータリーは感動をつくる

～これまでのロータリー・ライフで得られた数々の感動～

このうち、とくに大先輩とのふれあいで覚えた感動のいくつかをお伝えしてご参考に供したいと思います。

### ※ ロータリーにおける初めての感動

『ロータリーの例会では、地域社会の縮図がそこに再現される。即ち、業界の代表が互いに啓発されて高い境地を望み、学び得た高い境地をもって自己の家族、職場、地域社会を潤するもので、例会に欠席すると自己開発のチャンスを失うことになるが、これは自分の損失だけでなく、社会への責任も負わなくてはならない。』

これは1976年2月15日、日田市におけるIGFで、今は亡き薬師寺和寿地区ロータリー情報委員長から聞いた言葉ですが、この時の感動がきっかけでロータリーを更に知ることに努めました。別府ロータリー・クラブ入会6年目のことでした。

### ※ 小田一昭パスト・ガバナーからのご激励

83歳7ヵ月の時、病身ではあるが今からでも遅くないと思い、「職業奉仕の勉強」に取り組まれた業績は非常に大きいものがあります。その青年のごとき気迫は、『青春とは人生のある時期を言う

のではなく、心の様相つまり情熱であり、信念、希望、そして理想を抱き続ける限りは青春である。』というサミュエル・ウルマンの詩を心のよりどころとしておられたからであり、『毎日を最後の日なりと心得て生活せよ』というローマの哲学者 セネカの言葉を信条としておられたからでしょう。

先生はわたしが会長就任より退任に至るまで度々激励の言葉や、数々の文献を賜り、とくに退任に際していただいたお手紙は、今でも読むたびに感涙にむせびます。

#### ※ 後藤基彰パスト・ガバナーの思い出

『ロータリーを地で行く八賀山の下駄履き先生』これは、かつて私が『ロータリーの友』に『わが地区におけるロータリーの大先達』をテーマに取材した内容の一つですが、先生の形骸に接して久しいものがありました。

ロータリーのある会合において、『幹事は孤独である』と訴えた私にえらく同情していただいたことを今更のように思い出しますし、酒の宴でパスト・ガバナーの赤いジャケットと交換して『人生劇場』を踊ったことも忘れることは出来ません。

しかしながら、なににもまして、八賀山のお宅に始めてお伺いした時のことは、いまだに脳裏に焼き付いています。はじめて訪れた八賀山は、新緑にもえる大自然の中にあって、はるかに祖母傾山を

望み、全くすがすがしい別天地を感じました。“Nur ein guter Mensch kann ein guter Arzt sein”（良き人のみが良き医者であり得る）、この言葉は先生がとくに好んだ言葉と聞きました。

#### ※ 湯浅恭三元R I副会長の好きな言葉 “To know is to love”

これは湯浅元R I副会長が学生時代より好きだった言葉で、1991年国際ロータリーより出版された Rotary Wisdom の最後を飾るエッセーの中でも紹介されています。

先年、わたしがロータリーの友地区委員を務めた折り、当時93歳のご高齢にも拘わらず、ロータリーの友委員会特別顧問として、合同会議にかくしゃくとして出席されていた湯浅元副会長に、この言葉の意味について直接ご指導いただいたことを憶えています。この言葉のように、ロータリーを知れば知るほどロータリーが好きになるのではないのでしょうか。

#### ※ 遠藤健三名誉会員にお会いして

1991年（平成3年）11月11日、ロータリーの友委員会に出席の折り、合同会議までの時間をロータリー文庫で過ごしたのですが、その折偶然にも遠藤名誉会員にお目にかかり、色々お話する機会を得ました。

日本建築業界の大御所的存在とされる氏は、若い頃、今や別府市

の貴重な文化遺産となっている『中山別荘』の設計施工に携わられたとかで、大変懐かしく思われ、是非もう一度別府に行きたいと申されたが、翌年の平成4年6月5日逝去されたことを知りました。

氏は岐阜ロータリー・クラブのチャーター・メンバーで、創立以来55年無欠席を通し続け、創立より20年もの間幹事に就任されたことは恐らく世界記録であろうと言われました。この間『ロータリーの友』の初代編集委員長を務め、『ロータリーの友』の生みの親、名付け親として創刊に携わり、その発展に多大の貢献をされたことにより、『ロータリーの友』創立30周年を記念して感謝状と記念品を贈られました。また、『ロータリー日本50年史』の編集にもあたられ、お会いした時は93歳とお聞きしましたが、なお、かくしゃくとしてロータリーの勉強をされている姿に大変感動しました。辞するに当たり『温故知新』という小冊子をいただきました。

※ 黒田政文バスト・ガバナー（1969～70年度、三沢、254地区）より  
の手紙

『私のロータリー・ノート』を発行した時のことですが、『ロータリーの友』紙上で目に留められたバスト・ガバナーのご依頼により小著2冊をお送りしたところ、早速に礼状をいただきました。この中で、わたしのロータリーに対する火の如き情熱に感銘したと書かれているのに大変感激し、何度も読み返しては感涙にむせんでも

のです。

そして、『ロータリーには卒業なしですが、一部には会長や役員を卒えるともう何も為さらないナイフ・フォーク会員が多くなりそうですが、“ロータリーには客席はない”という考えをさらに徹底してほしいものです』というご忠告をいただき、ロータリーへの情熱を一層かきたてられた次第です。

## ロータリーは夢をつくる

ロータリー財団管理委員会は1990年6月の会合で、“To dream a new dream”というタイトルの声明を発表しましたが、これはポリオを単に制圧するだけでなく、根絶するという新しい夢をもって引き続き援助を必要とする諸国にワクチンを供給すると述べ、国際ロータリーは2005年に100周年記念とポリオのない世界、即ち polio-free world という二重の慶びを味わうことになるとしています。

その後ジェームス・レイシー 1998～99年度R I会長は“ロータリーの夢を追いつけよう！”をテーマに掲げ、『友』11月号には『ロータリー財団：夢は生き続ける』というタイトルのメッセージを載せていますが、この中で、“Nothing happens unless first a dream”というカール・サンドバーグの詩の一節を引用し、その正しいことを



述べています。

また、『未来のためのロータリーの夢委員会』（委員長はダクターマン元RI会長）を発足させ、新千年紀を迎える組織に新たな活力を与えるための夢を世界中のロータリー・クラブから募りました。そして、これを綿密に評価した上で、新世紀におけるロータリーの奉仕の青写真ともなるべき18項目の提案をしました。

このようなロータリー財団の著しい発展は、財団の父とされるアーチ・クランフの夢が実ったものであることを再認識しなければなりません。

## ロータリーは青春をつくる

1992年6月15日 96歳の長寿を全うされた小田一昭パスト・ガバナーは、1896年（明治29年）11月15日 熊本県牛深市に生まれ、1920年（大正9年）熊本医学専門学校卒業後、海軍軍医学校を経て海軍大学校教官、別府海軍病院長を歴任。1946年に熊本市に小田医院を開業されました。1958年熊本南RCのチャーターメンバーで、1961～62年度、1962～63年度クラブ会長、1971～72年度地区ガバナーをされ、1991年7月には名誉会員に推挙されました。

83歳7ヶ月の時、病身でしたが今からでも遅くないと思い、「職業

奉仕の勉強」に取り組み、その業績は非常に大きいものがありますが、先生はとくに「ロータリアンの個人的奉仕活動の積極化」を唱えられました。

その青年のごとき気迫は、『青春とは人生のある時期を言うのではなく、心の様相つまり情熱であり、信念、希望、そして理想を抱き続ける限りは青春である。』というサミュエル・ウルマンの詩を心のよりどころとしておられたからであり、『毎日を最後の日なりと心得て生活せよ』というローマの哲学者セネカの言葉を信条としておられたからでしょう。

この意味でロータリーは青春をつくると言えるでしょう。

## ロータリーは平和をつくる

1921年、スコットランド・エディンバラの国際大会において、「ロータリーの綱領」の中に「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。」という第4項が組み入れられ、その後世界中のロータリアンは色々なプログラムで世界平和についての視野を広め、その平和への情熱を声高く表明してきました。

しかしながら、1945年以来、120を超える深刻な武力紛争が世界各

地の国を荒廃させ、2,500万人以上の人々が犠牲になりました。そして、およそ20から30の紛争が未だに終結していないのです。

国際ロータリーは、国際的な政治問題に対する団体声明をすることは禁じていますが、平和と正義の原則に基づき国際的難問を平和交渉によって解決するために自己の影響力を行使することは、推進していきます。

国際ロータリーでは、この度、2002年に始まる国際問題研究を目的としたロータリー・センターを設置することにしました。このロータリー・センターは、著名な大学と協力関係を結ぶことによって、平和、紛争そして世界理解の分野における最先端の研究や教育、それに認識や知識を助長することが出来ますし、また、多くの団体をリンクさせて紛争を解決し、平和に満ちた環境をもたらすことを目指すという大きな目標を掲げています。

このロータリー・センターで研究に従事することになる「ロータリー世界平和奨学生」は、普通の国際親善奨学生と異なり、紛争解決の要点や平和研究を含んだ修士課程の2学業年度、研究に従事することになります。

国連難民高等弁務官の緒方貞子氏はこのロータリー世界平和奨学生の先駆者であり、絶好のモデルとなる人物です。

彼女は24才のときに女性として日本で最初のロータリー財団フェローに選ばれ、ワシントンDCにあるジョージタウン大学で国際政治学の

勉強を始めたのがきっかけでした。

このような人を一人でも多く育て、世界に向けて送り出すことが今や最も大切なことではないかと思う次第であります。

ロータリー・センターは、次の7センター、8大学に設置されます。

- \* デューク大学・ノースカロライナ大学 (米国)
- \* 国際基督教大学 (日本)
- \* パリ政治学研究所 (フランス)
- \* サルバドル大学 (アルゼンチン)
- \* ブラッドフォード大学 (イングランド)
- \* カリフォルニア大学バークレー校 (米国)
- \* クイーンズランド大学 (オーストラリア)

一人ひとりの奨学生への支援は、世界中から集められた地区財団活動資金 (DDF) によって運営されることになっていますが、このネットワークを作り出すことによって、環境上の争いや大量難民、資源紛争など、山積している色々な問題のいくつかを解決するために、具体的な貢献をすることができます。

「ある人にとってはゲリラでも、他のだれかにとっては自由のために戦う人であり、宗教的狂信者は一方では正義の勇士なのです。さまざまな紛争の研究とその解決策を多岐にわたって試みることは、私たちにとっても教訓となるのです」とロータリー・センターの一つであるサルバドル大学 (アルゼンチン・ブエノスアイレス) のメイキン教

授は語っています。

ブラウン元R I会長の好きな格言のように、世界の平和は人間一人ひとりの心の中につくるものですが、平和への道 (The path to peace) は中々きびしいものがあります。

Rotary is “Thoughtfulness of  
and helpfulness to others”

ロータリーとは“他人に対する思いやりと、  
他人の為に尽くすことである”

チェスリー R. ペリー

## おわりに

以上、“ロータリー礼賛”と題して述べてみましたが、これは取りも直さず“ロータリーの魅力”に通じるものであります。最近のロータリーの現状を見たり、聞いたりしますと、どうも形式にのみとらわれて“こころ”の問題が等閑にされているように思えてなりません。

今、ロータリーにとって一番大切なことは

会員一人ひとりの善意の高揚であって、会員一人ひとりが真の良きロータリアンになることでもあります。

これは サブ元R I会長の言う「完全無欠なロータリアン」

ダクターマン元R I会長の言う「真のロータリアン」

ラビッツア前会長の言う「優れた素質をもつ会員」

デブリン元R I会長の言う

「進んで行動する proactive なロータリアン」

に通じますが、それにはどうするかと言いますと、“折角ロータリーに入ったからには、自分なりにロータリーのいいところを見つけ出し、これに惚れ込むことである。”(岩切章太郎氏)ということでもあります。

これは、パウロ・コスタ元R I会長の“Diving into Rotary”と通じるところがありますが、ここで思い出されるのが湯浅元R I副会長の学生時代から好きな“To know is to love”という言葉であります。ロータリーを知れば知るほど好きになる。これこそ真のロータリアンに通じる道ではないでしょうか。

【著者略歴】

鳴海 淳郎 (なるみ じゅんろう)

- 別府中央ロータリー・クラブ シニアアクティブ会員 (皮膚科医)
- 日本皮膚科学会功労会員
- 別府市楠町14-8  
医療法人社団 鳴海クリニック 理事長・院長 (皮膚科・形成外科・外科)
- 1970年9月 : 別府ロータリー・クラブ入会
- 1986~87年度 : 別府ロータリー・クラブ会長
- 1988~87年度 : 特別代表
- 1989年3月 : 別府中央ロータリー・クラブ創立会員
- 1988~89年度 } 別府中央ロータリー・クラブ初代会長
- 1989~90年度 }
- 1991~92年度 } 国際ロータリー第2720地区 ロータリーの友委員
- 1993~94年度 }
- 1995~96年度 : 別府中央ロータリー・クラブ会長
- 1996~97年度 } 国際ロータリー第2720地区 大分県第三分区代理
- 1998~99年度 }
- 2000~01年度 : 国際ロータリー第2720地区 ロータリーの友委員

マルチプル・ポール・ハリス・フェロー (8回)  
ベネファクター、米山功労者 (2回)

【著 書】

- 1) ロータリークラブ入会のしおり (新会員のためのロータリー情報) : 1981~82年度
- 2) ロータリーは何をしているか : 1986年9月
- 3) ロータリーの魅力 : 1987年12月
- 4) 会長の時間 : 1988年2月
- 5) ロータリー・テスト : 1988年12月
- 6) 私のロータリー・ノート : 1990年8月
- 7) ロータリーと共に : 1995年3月
- 8) ロータリーと新世代への奉仕 : 1996年9月
- 9) ロータリーと私 : 1997年11月
- 10) "He Profits Most Who Serves Best"について思う : 1998年7月
- 11) 子どもに夢と感動を与えよう : 1999年1月
- 12) ハーバート・J・テラーの「我が自叙伝」を読んで : 1999年3月
- 13) ロータリー物語 : 2000年1月
- 14) ロータリー財団の父 アーチ C. クランフの人となり : 2000年5月
- 15) 会員増強について考える : 2000年5月